

14歳の拓いてゆく道

辻 憲男（文学部教授）

「相生と書いて、おう、と読ませるこの町は、瀬戸内海の小さな港のひとつであった。一里ばかり出て行けば、山陽本線の那波（なば）という停車場へ出る」。父が造船所に就職したので、14歳の「私」が呼び寄せられた。東京で働いているより、「田舎だっていいわ」と思った。女学校へは行けなかったが、父の世話をしながら、内外の文学書を存分に読んだ。「私の運命が、新しい視野へ方向をむけたのだ」（佐多稲子『素足の娘』）。

やがて若い継母が来て、家事や裁縫を教わった。二年で東京に戻り、以前勤めた上野の料亭で働いた。文士たちに可愛がられた。「僕の手は、鶏の足のようだ、と人が言ったよ」と、芥川龍之介が言った。菊池寛や久米正雄が同席していた。稲子は傍らにかしこまって、鯛ちりの鍋の火加減を見ながら耳をそば立てた。…芥川のことはその手ばかりを覚えていて、顔が思い描けない。その死の直前にも会ったが、意味ありげな言葉を残したことを忘れない（『私の東京地図』）。

上の自伝的小説の後記に、作者は“私はまだ作中の少女のうしろ姿から目が離せない”と書いた。娘時代の自分と同じだから、「何だか可哀想でしかたがない」。しかし「苛酷」とも思えるほどに突き放し、甘やかさなかった。「私はこの少女の遭遇した事実に、解決を与え得なかったかも知れない。読者はどうぞ、この少女の一途な生活意欲の中に、彼女のやがて拓いてゆくであろう道を想像して頂きたい」。己にきびしい文学者だった。



兵庫県相生市の図書館前にある文字碑。稲子が相生に来たのは、米騒動の起きた1918年。造船所は神戸の鈴木商店の経営だった。